

研修Ⅱ 「若い教師のための基礎・基本講座」Ⅳ

物語文編「深く読み、学び合いたくなる国語の授業」

～教材文『ごんぎつね』（東京書籍4下）を題材として～

はじめに

「何をどのように学ぶか」を教師がきちんと考え、子どもたちの前に立たねばならない。子どもたちに学ばせたいことの何十倍も教材研究をし、学びのプランを立てる必要がある。

1 物語文の学習で付けたい力を付けるために

—特につながりのあることからや単元に着目して—

(1) 学習指導要領を読む。

(2) 教科書の構成〈物語文〉を知る。

① 単元の配列を横に見る。

② 単元の配列を縦に見る。



③ 本単元の位置付け

中心となる人物とほかの人との関わりについて考え、感想を伝え合う。

(3) 教材文を読み取る。※3 物語文の教材研究参照

(4) 子どもの実態をとらえる。

① 国語科での学びは？

○ これまでの物語文単元での読みの力

3年 中心人物 4年 中心人物の気持ちの変化

○ これまでの単元での学び合う力

書く力、伝え合う力、深め合う力

○ 日常の読書

読書習慣、傾向

② 学級の実態

○ 学習習慣

○ 学習の雰囲気



本単元の学習を通して、「子どもたちにどんな力をどのように付けたいか。そのために、どんな単元構成やどんな教師の支援が必要か」を決める。

2 物語文の学習で付けたい・使えるようにしたい汎用的な力

—「〇〇」以外を読むときにも使えるということ意識して—

(1) 構成を読む力

「はじめはどうであった誰かが、何によりどのように変わった話」と一文でまとめる。



あらすじをとらえる力

「時・場・人物」の言葉を使い、各場面を一文でまとめる。



場面分けできる力

(2) 表現を読む力

情景描写、技法の効果、地の文と会話文・心内語の区別、呼称表現の変化、行動描写の変化



人物の行動の根拠や気持ちを見える化できる。
人物の行動や情景を想像する力、人物の気持ちを読む力が高まる。

(3) 作品（まるごと）を読む力

「悲しい話」「ほっとした話」の根拠となる人物の行動や気持ち、表現の着目点を大切にする。そのような学びの経験を通して、読後、感想をもつ力、主題をとらえる力を高める。

★思考の一つの手段として「比べて読む力」を高める。(意図的支援)

3 物語文の教材研究

(1) 作者を知る。

(2) 作品を知る。

(3) 教材研究ノートを作る。

- 自分で音読しながら気付いたことを本文に書き込む。
- 同じ場面でのつながりを考える。
- 前場面までとのつながりを考える。

おわりに

教材研究が十分な状態で子どもたちの前に立つと、自信をもって授業ができる。子どもたちの意見や疑問を聞きながら軌道修正ができる。教材文が立体的に見える状態になっておくと、取り上げる言葉や文、深く読ませたり学び合わせたりする言葉や文が分かる。

教科書会社の指導書や赤刷りを使って教材研究をしてもよいが、年間に数単元は、自力の教材研究に挑戦してほしい。